

門 遠 13 特
冊 2208
卷 25

星月夜頭晦録五編卷之五

目録

○周易九龍の悔ある辨

禪師公暁雷霆を觀究る圖

○実朝公右大臣拜賀のる鶴岡へ社

鎌倉天変惟異の圖

実朝公鶴岳社奉奉行列の圖



星月夜頭晦録五編卷之五

周易九龍の悔ある辨

周易乾の卦へ六爻より龍の蟄し潜るより天ふ上るとの象を假
 と説く。其の上九の辭は九龍悔ありと云九は上九と訓至極の
 地位と云。龍の天上まると勢ひささるべく衝沖へ九龍龍へ此上
 ちて所より昇つめらるんゆ。又の降り降るの悔あり必然なるべ。
 此理を云く。然るも實を龍のこふあり。今日の人事を演るのこふ
 能も目前の理の適當なるも徒然草の吉田の兼好繼後の書に
 文がら。九龍の悔をのくる糸わり凡物九分より十分は満とは溢
 ざるも。天下の諸數十小至ま又一ふりたる。俚俗の諺は出頭眞
 を衝とも云歎究ま悲を生。樂むのの頻と苦と。益しと止むれ

星月夜頭晦録五編卷之五

三

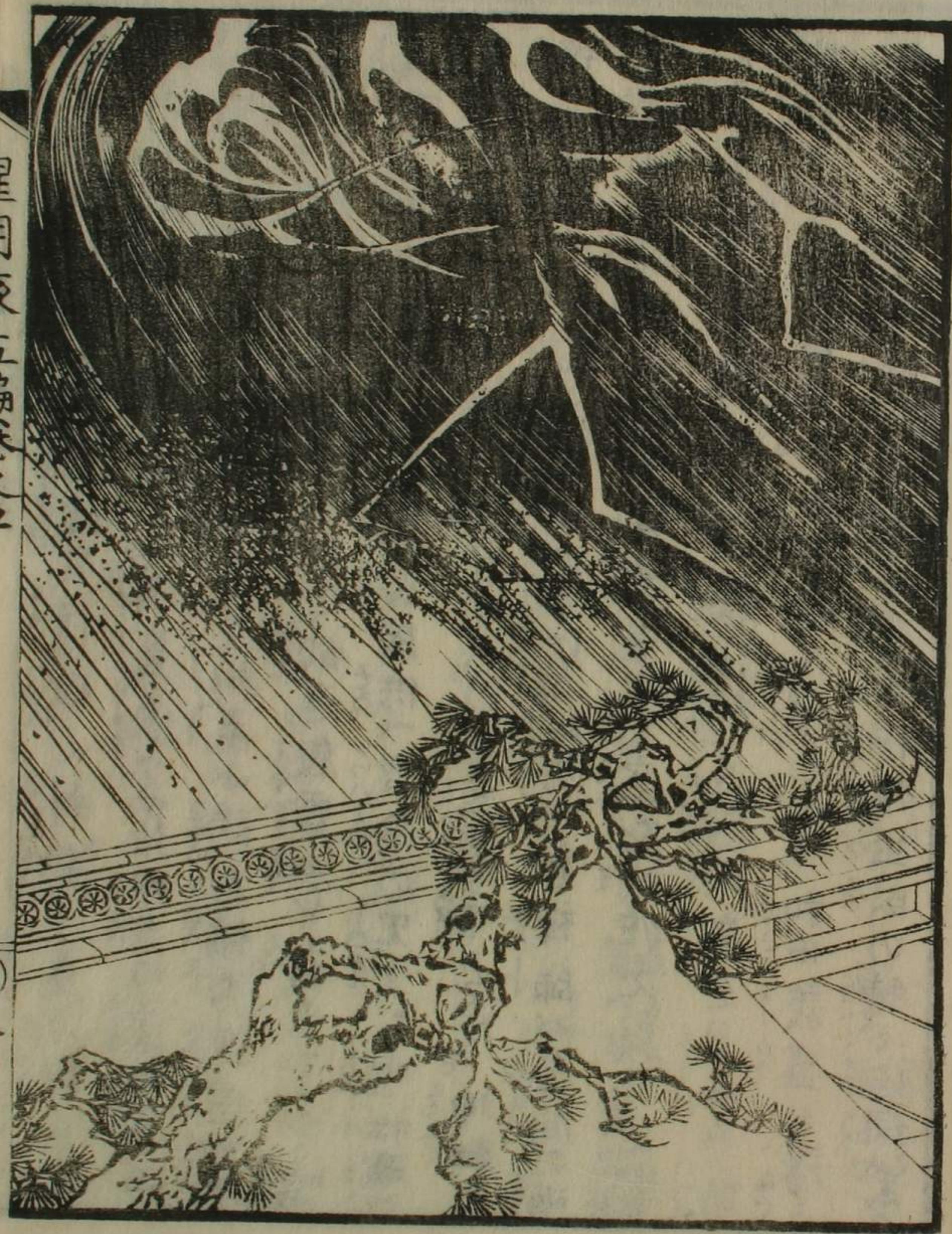
臣のヤハ大小とちり。許容し多むとゆふとちり。此の時ふ
 暨びさしを天下政道の師範とす。故右幕下まう宗敬のヤハ
 廣元八道のヤハを受用し多むる。故義盛さびむ在柄
 淵長が憂し凶變の期到来し免がら死天の責とちり。残
 悔の次第あり。就とも二位の尼政子。文智賢き女性。此の時
 只管嫉妒の念深死に。あまの闇よされ眼前ふる。死哀を
 知るべ。此段本朝のよみあは。漢の高祖の呂后唐の太宗
 高宗ふ仕へ。武氏後。則天皇后とす。簾を垂と萬機を

決せり。此両后漢土めく代ふ。稀なる才智といふも。竟あそ
 呂氏と武氏を亡滅し。祖先を永く血食せし免がら。女子
 ふ生とす。男子の事ふ関了。已が少智ふ慢むとす。北魏
 禁婦の長き舌ある。禍の原ある。詩書ふ顯然する
 或や偕又禪師公曉の生立義盛見る所あり。種く公胎
 を胎しけは。尼公偏ふ和田を忌猪とあふ心より。其中れを
 理非善惡の差別さく。つも五用ひらと。抑鎌倉家二代
 頼家卿ふ男女の消息四人あり。第一も一幡君とす。母公と
 比企の親判官義員女。一旦頼家卿病ふ依と。東二十八個
 日本總追捕使を一幡君ふ議多ふの処。能員外戚の威
 小纂王。千幡君。實朝公。此知名と平時政と公討んと計す。吉又露と却

一幡君母子も其身も亡びし。二編目次へ女子めく。後年後
倉家の跡目とく。京都より下向ありし。頼經卿の御臺所
より一が五ヶ年めお覺を自り。次を千壽と申。泉小次郎親
平取立く君と。北条を滅さんと独心中お籠りし。世は
早くしるも世へ空くし。次お善哉君。則公曉悪禪師。是
又親平諸士と語ふお及らる。此人と君と仰ん巧なりし。母公へ
加茂六郎重長の女めく。鎮西八郎為朝の孫女なり。八郎は
曹子の剛力精兵よりし。三歳の児童も知る処。此佐力
を擬肖ししるも。禪師の容貌飽ちて是し。心魂物を怖
る処なり。力量幼少の時より丈夫お増と。巴成童を越るも
弥壯勇強力。目も赤し。死るも多し。いさご江列三井寺ふ

おせし。比山内めく。児と戯を遊びぬ。ぬも動まは相撲
脱押お暴く。敷所業ヲりけは。公胤僧正の耳お入る。苦く
敷るも多し。毎く教戒を加へて。佛門お入る。上を得度。心
がけ忍辱第一の旨を演。古今の例を引くも。が死るも。説示
と多し。されども。此君信実。新門お飯し。ぬもあつぎ。是るも
牛若御曹子。鞍馬山お在し。お等く。内心へは。屈伏しぬ。
唯お亡父頼家。卿奸臣等。が。お社。年ゆも。至し。あつぎ。死し
ぬ。上。叔父実朝。公お祖。父草創の家。督を棄てし。是るも
つ。時節を待ぬ。鎌倉の君臣。お此怨を晴さず。置お死や。肉縁の
續も重くも。お是。當鎌倉家。おま。く。父の誓。何ぞ。俱お天
を戴。死と。是れ。お少。お籠り。表ぬ。頭。されぬ。元來。巧黠。ちるも。お

五



禪師公曉
雷震茲觀
究る圖



五

五

師の坊教訓ある時ハ虚涙を浮べ敬ぐ拜聴し居り。鶴岳へ
 移りも或夏のあたりに。薄暑凌ぐ死四方の空ハ雲の
 峯尖く聳ると見え一陣の足柄風ハ誘を倏ち黒雲霞復
 耳の兩條を衝電光眼を打く閃き般霆山を山崩さるり鳴
 裏ハ坊中湊王。神燈を挑香灰供へ雷除の咒文を唱社職ハ
 廣前ハ祝詞を捧げ恐怖せざるハ。幾回も唱り。坤軸も
 推る程響く境内の古樹ハ墮ける此折し。禪師ハ居間の兩
 戸押開け縁端ハ座一自若とし。空を眺て免れせし。響
 とそのハ墮る方へ逸泰ハ走り行くと其形勢を可ん届多ハ脚
 臆す。躰ハ泥ゆぞ一山舌を巻く懼あえり。和田義盛ハ豫
 細作を入置禪師三井寺ハ在り。行住坐臥の種々追伺ひる

也。北条ハ密謀の助るハ慮存生る。内々毎ハ公と
 保せざりしぞり

実朝公右大臣拜賀の為鶴岡へ社参

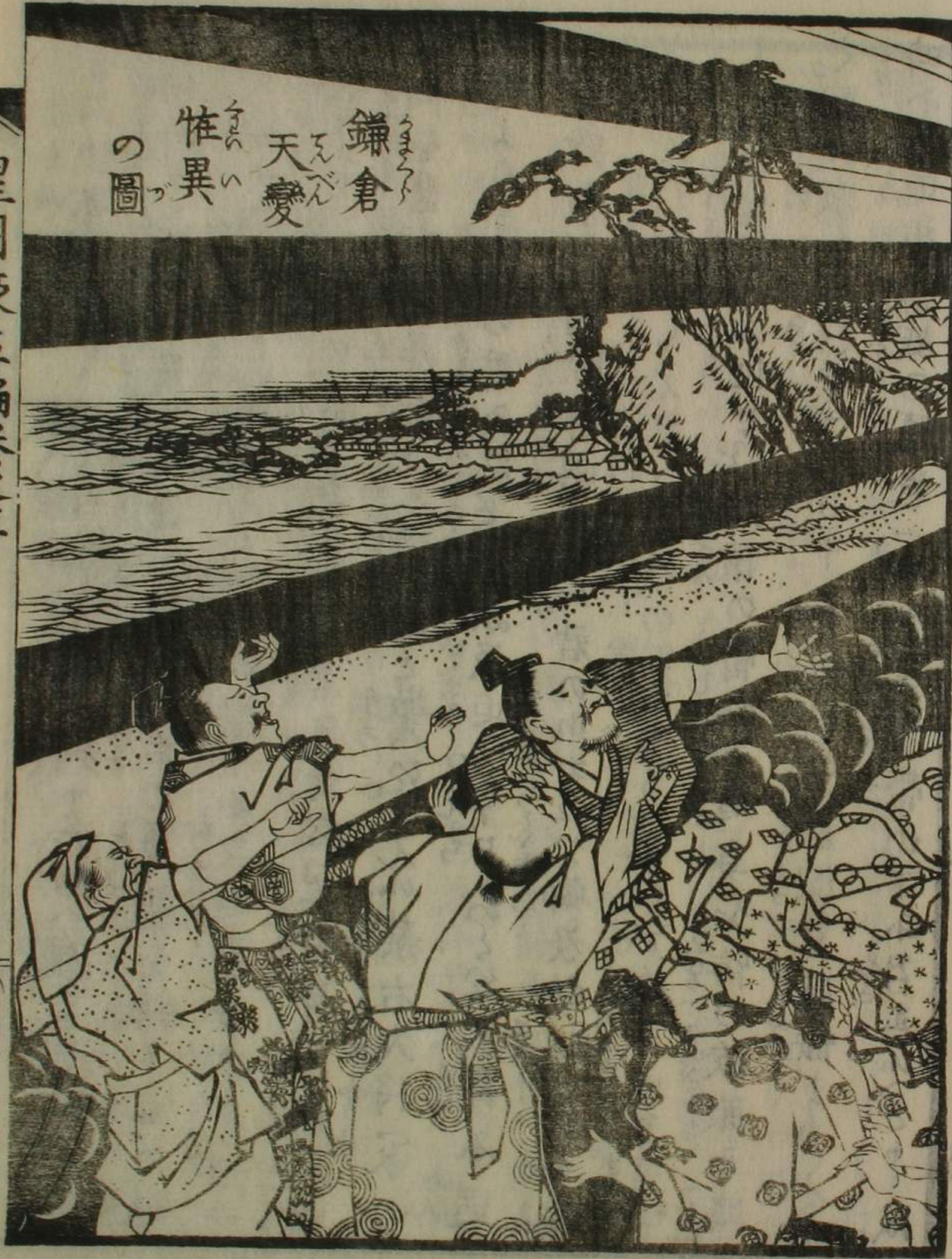
叔も実朝公ハ頻ハ官位昇進し。心ある輩ハ満々
 たりありと。私ハ危ハ外ハ同ト年十二月ハ公卿右大臣
 藤原道家公。左大臣ハ轉任せし。時右大臣の々々ハ依
 関東の実朝公と是ハ任せざる。諸卿其儀ハ然ハ格
 格別の功勞も。一ケ年の内ハ屢官位を進ら。規格
 例ハ合ざる。区々ハ決せざり。実朝公ハ風流の志厚
 く。歌道上達せ。内裏仙洞ハ殊勝の。三代の内ハ
 勝ハ負。竟ハ正二位右大臣の宣下。此時尼公ハ後

二位ちうい小叙せうじゆせしむ。北条陸奥守義時ひつのおのりと右京大夫うきやうの小補せうほせしむ。正五位
下した小叙せうじゆせしむ。諸臣しよじん又任官またにんくわんヨリより。さしさしバ鎌倉御所かまくらごしよの殿との采目さいもくご
ままししく。花はな麗れい十分じふぶんふふししく。今頼朝卿いまよりともきみ再生さいせいししくく見み多た。何なにと宣のたまふ
ぶぶと私語合ひそごあひ。元龍悔もとりゆうくわいあると知しざるは。凡夫ぼんぷの浅あさなりなり。凡おん君臣きんしん上下
悦よろこ合あささめくめく知しふふ。ある夜あるよ白虹はくこう東方とうほう小見せみ。片雲へんうん競集きやうしゆくく。星希せうきの夜半
小せう及あびび兩降りうかう出いづづればれば。霞あせを消くええ跡あともも。人ひとくく。恠あや多た入い処じよ小せう。又また兩りう音
夜過よた卯うの刻ときををりりふふ。五色ごしきの虹にじ西方せいほうふふええ。上かみへへ黄きふふししくく。次つぎにに赤あかく
次つぎをを青あおくく。内うちの方かたへへ紅梅こうばいのおおどどしし。光ひかり天地てんち小映えいトと輝あかりけるける。暫しば時とき
ふふししくく。黒雲くろぐも一天いつてん小且せうじゆ風かぜ發はすす。其その後あと兩降りうかう出いづづればれば。又またふふししくく。か
るる。驟あつ疎そハハ前代ぜんたいめめもも言こと傳つたへへるる。奇あま異いの珍ちん怪かい天てん變へんかかくののごとごとくくんんバ
人ひと事こと小せう忘わすれれるる。知しりりるる。んん。いいついつささるる。世よの中なか穩うちちるる。ヤヤトト前ぜん兆ちやうと

恐おそぬ者ものぞぞありありけるける。然しかるるふふ十二月じふにがつ末すえふふむむくく。戌いぬの刻ときををりりふふ
流星りゅうせい乾けんの方かたよりより異いととここここ。おお渡わた大だいささ。満まん月げつのおおどどしし。一時いつとき小
輝あかりくく。るる者もの魂たまと消くええ恠あやけるける。其その年としもも尽つくく。建保けんぽ七しち巳し卯う年とし春はる
ととなりなりしし。摠もくく君官位昇進きんくわんたいしやうしんの時ときハハ鶴岡つるがわ小詣せみしし。小拜賀せうはいがの式しきあり
行列ぎやうれつ壯觀さうくわん美々びび敷しきとと。殊ことふふ旧冬きうとう右大臣うぎだじんと賜たまふふ。口くちへへ。當あた正月とうしげつの内吉うちきち
辰たつみと撰せん鶴岡つるがわ小於せうここのの拜賀はいがあるあるべべししとと。供奉くわんぷの行列ぎやうれつ隨したがひひ以下
の人ひと數かずと定さだむむ。大夫判官だいつはんくわん行村ぎやうむら此こののとと兼かね頼朝卿よりともきみの時とき隨したがひひと
定さだむむ。諸士しよし別當べつたうあれあれとと兼かね譜代ふだいの勇士ゆうし弓馬きうばの達者たつしや。第一だいいちと
せせしし。ののおおるる。小此度せうこのたびの拜賀はいがののままごご例れいちちるる。とと。容よう儀ぎ秀しゆ麗れいと
第一だいいちと定さだむむ。誠まことの武道ぶどう廢ふババ。かくかく不要害ふようがいののるる。ふふふるふる。歎なげふふ。
とと。大内おほうちめめくくもも兼かねくく。鎌倉かまくらよりより大臣だいじんの大饗だいきやうと行いるる。べべしし。とと。奉ほう同どう

あるるの公卿評議あり。諸卿下向むべし不定也。他車裝束以下
の調度亦於る。仙洞より下し置る處。是又頼朝卿の時々
上洛の上拜任の式あり。當君亦至り諸卿と鎌倉へ招向らる
の。よる坊門大納言忠信卿を始上達部殿上人より發興
あり。各鎌倉亦着るひける。正月廿七日最上吉辰亦付申の刺
過より御所と出興成の刺也拜賀の礼式有べし。觸らむは
供奉の面く是と領兼し。各綺羅第一と支度亦及び。各其
日夜待居し。時亦大江入道君邊亦ゆる。此度の典禮夜中
行進あり如何。第一用心もあし。物の奇羅も定る。は
く刺限と觸直され。昼の間亦相浴いん。然るべくいと有
ける。文章博士仲章欺唾靜謐の世亦何条る。いん。本来神

道ハ夜中秉燭ゆる。ゐるとや也。觸直亦及さる。り。かく
當日のも成けし。宮内兵衛尉公氏。髪亦矣。の。髪を搔進せ
る。君髪髪を扱。公氏亦仰る。汝度。髪亦出。太僕
我毛髪をせ。置べし。人の老少不定。世の習る。是も後
筥ふせ。と仰らる。折もあ。今今朝。思。此を言
あ。不吉。と愕。ひ。其。ヤ上。然。と慮。
頂戴。君萬々歳を登。某又君の毛髪を賜。誠。昵
近の面目。子孫。讓。いと。髪相浴。公氏。椽
通へ退く時。公氏。庭前の梅を一首詠。吟。多
か。禁忌の致。よ。み。あ。不。以。残。其。日。午。の。刺。め。る。り



星月夜

乙



星月夜

乙

けは。供奉の面く。追く相詰る。未の刺で。残らば。揃と。出
 交相待る。大江廣え入道仕あり。君の尊顔を拜し。何の故
 も。ち。死。ふ。両。く。と。泣。出。是。つ。と。心。付。我。此。幸。不。及。近。更。あ。く。と。泪。の
 瀟。覚。る。心。障。の。ろ。ろ。と。あ。る。君。又。是。死。死。咎。多。い。覚。阿。入。道
 ち。何。を。悲。や。と。心。尋。あり。入。道。を。と。驚。死。さん。い。某。右。大。将。家。の
 此。時。より。三。代。の。君。不。仕。老。衰。不。及。迫。ふ。今。日。お。と。た。大。禮。不。遇
 ち。あ。れ。兩。眼。鮮。明。と。い。ふ。君。の。心。立。公。卿。及。び。壯。士。ら。が。曠
 が。り。行。粧。を。も。見。い。ふ。老。後。の。必。出。ぬ。も。仕。べ。死。を。近。年。心。身。衰。弊
 一。行。住。坐。臥。心。不。任。せ。ば。残。懷。の。鬱。胸。不。逼。身。を。悔。の。淚。眼。不。湊
 と。圖。は。敬。を。失。ひ。ゆ。と。心。答。や。よ。う。れ。け。は。君。深。く。感。慨。ま。り。く。る。
 時。入。道。唐。錦。威。の。腰。卷。一。領。を。呈。東。帶。の。下。不。召。は。い。へ。と。や。死。

仲章は側不在と大臣よりの人腹巻を召す旧例ありとやける
 心へ覚阿入道重ねと故右大將家南都東大寺供養の日腹巻
 を召し先例を以て何う苦うべとせむ仲章又右
 大將家大臣に至り其東大寺へ鎌倉と国を異ぬ何
 そ四海清平の時心所より僅鶴岡を参詣あらん左近
 の心公配有死隨兵數人行列まゝ何の為みぞや左近用
 心あらんぬ御所よりまゝと云も平服にて在せ難うらん入
 道の遠慮甚と云く覚外と申上る君元來武邊の心嗜み活
 けは終不仲章が詞も同ト多し腹巻も召まごり。皆是天の
 命まろ知是非も死次第と入道再び争ふ止またり。扱を定
 らせし制限もあらば君ゆき衣冠束帶めく御車召し行列

先一番小居飼四人吉人四人一員二行小列二番小將曹菅野景盛
 府生狛盛光仲原成能束帶ゆく續り三番小殿上人中宮権
 大夫頼氏一條侍從能氏一條少將能繼左兵衛佐頼經因隣守師憲
 伊豫少將実雅伊賀少將隆經左馬権頭頼茂三位中将信能文
 章博士仲章四番小前駐平勾當時盛藤勾當頼隆駿河守
 季時左近大夫朝親相摸守經定藏人大夫以郡藤右馬介
 行先藏人大夫忠國左衛門大夫時廣伯耆守親時上總介
 美氏相摸守時房藏人大夫重細左馬権佐範俊右馬権助
 宗保和泉守親廣藤藏人大夫有俊筑後前司頼時大内修理
 大夫惟義北条右京大夫義時五番小隨身上臈ゆ番長下も
 敦秀府生泰兼峯下臈小泰公氏同兼村播磨貞文大甲

臣近任下も敦光同敦氏六番小正二位録倉右大臣兼左衛
 大将源朝臣実朝公八葉の車鮮爽身小衣冠嚴然として日
 御車副四人平禮小白張を着り牛童二人山吹色の狩衣を
 着り七番小隨兵武田五郎信光黒糸威の甲小笠原次郎長
 清小櫻威の鎧伊豆次郎左衛門尉頼定萌黄糸威の甲隠岐三郎
 左衛門尉基行紅糸威の鎧大須賀太郎道信藤色威三浦太郎兵
 衛尉朝村紫糸威河越次郎重時紺糸威萩野次郎景員淺黄
 糸威秋田城少景盛朽葉色威侍所別當左衛門尉行親赤草威
 同々の役として北条式部太輔追轉補せられし泰時黒草威此兩人
 隨兵先陣の押り八番小雜色二十人御笠兩皮張延持各一人九番
 小檢非違使加藤判官景麻束帶の上小時絵の太刀を帶郎亦

四人小舎人二人雑色六人看督長二人火長二人放免五人を具し。十番小御調度掛佐々木左衛門尉義潔十一番小公卿坊門大納言忠信卿。西園寺宰相実氏卿。宰相中將國通卿。八條三位光盛卿。刑部卿三位宗長卿以上五人各車小乗之隨身布衣を召具せり。十二番小後陣の隨兵加藤左衛門大夫光員二階堂壹岐守行村。同民部大輔行盛。中条左衛門尉家長。後藤左衛門尉基綱葛西壹岐守清員。関左衛門尉政綱。布施左衛門尉康定。小野寺左衛門尉秀道。伊賀左衛門尉光季。天野左衛門尉政景。武藤左衛門尉頼茂。伊豆左衛門尉祐時。足立左衛門尉元春。市川左衛門尉祐光。宇佐美左衛門尉祐長。佐貫左衛門尉廣綱。宗左衛門尉孝親。伊達右衛門尉為家。江左衛門尉範親。紀右衛門尉実平。源

四郎右衛門尉秀氏。塩屋兵衛尉朝葉。宮内兵衛尉公氏。若狭兵衛尉忠秀。岡崎兵衛尉俊久。東兵衛尉重胤。土屋兵衛尉常秀。狩野七郎光廣。皆甲冑弓箭兵杖を帶し。郎従者凡千餘騎。小及び歩卒小至く八万を以數べし。今日の行列善美もみ尽し。前代の例なく。後代又有登りつと。尼公御臺所。御所の南門の外。御覽の場を修營す。簾をかろし。此処御覽あり。其外諸士の家族。ふるまひ。祭禮の渡るを待か地して。此処彼所。小仮家を構へ拜見を免され。路次の左右。小下賤の拜見を免されける。故兼と近國を小油汰有。貴賤老若群。程小路頭。双方鶴岡。小至まぐ充滿く。頗喧嘩りけし。衝街。警固。嚴重めく。是奴制まども。飽が上。小湊集。男女推合。込合て。狼

皇月支五編卷ノ一



五月廿五日



實朝公
鶴岳社
泰供奉
行列の
圖

五月廿五日

籍不禮を駈靜の間ちりり。既ふ行伍靜くと踞行と君
の御車御所の南門を通せり。比山鳩飛来と頻小鳴噪とさか
から物の兆を告ふ似れば供奉の面く奇怪の以ちさか漸鶴
岳小恭着せり。今日の摠檢校へ佐々木判官廣細山城判官行
村西人兼とさば各束帶一神宮寺の櫻門の左右小別と跡几
の腰を掛在と前後を指揮ま若宮の橋の処小至らせり。時文
章博士仲章奏と御簾を揚と右馬頭頼茂ハ揚とさり。少將
義経御香を進と少將実雅君の裾を取録倉の執権北条右京
大夫義時と御劔の役者なり。此処小於と俄小心地とさり
むと。御劔を仲章小渡し頼置と直小退去ふ及ひ
不審とさされける。君御車より下んとさり。入時ハ太刀の柄車

の形小入と。折と折とけと。當惑し。多ふを仲章是を
と。苦うもいさしとや。木を結副と進せたり。さ。頼朝御
辛万苦の大業今此君小至と。一時小失ひ果えん前表か。さ。及
もあらん苦と。後小て。以合され。君臣神め。あ。種。唯奇
恠忌と。とのさめ。親眼下危急の變を知人さ。ふちりり。北
条義時兼と人を以と誰云とさ。禪師公曉へ當時の实朝公
の父の仇とさ。忘るふ。死ふ。あ。君を頼朝卿正統の也孫とさ
ま。や。六。運来時誰人う伏し。な。ざ。らん。幸ひ。さ。る。今月
廿七日大臣拜賀の式夜陰ふ及と行る。是天より時節を賜ふ。其
其節也智計を廻と。然るべと。告め。る。禪師公曉。大膽。不敵
の生質。悦と。独點頭。い。ふ。も。廿七日を待と。運を閑き。四代。の。武

將備入のものとユ夫及のふと名欺しく美時禪師公曉を誅戮
君ちんバ巳武將の宣下をぬすた鎌倉の諸臣へ我臣下同様
ふなり。折をぬぐ大業を閑んめとの了簡入是尼公も知るべきり
知和田美盛が國家の爲ふ賊臣を誅せんと企且禪師公曉を害し
捨んと計し。而眼鏡の明ちるがあとしあるゆへ自害ふ及也も我
一命へ君の由爲ふ弁止惜ふ足は唯頼朝卿の大業を一旦他人の
物とせんを歎と云り。美時又美盛在てふとも已が計美成さるゆへ
常ふ傾んををり恐るべし。然るふ北条泰時を今日行伍の
列ふ在る。彼侍所の別當これ隨兵の面を指揮するゆへ父不
快とく退させしも曾と知は元來泰時へ賢者あれば語ふが兼
知せざるを知と美時更ふ内意を語ゆは他人を語ふともせは其身

一己の密謀より密ちるが故ふ一旦の謀計を仕遂し泰時若御
ふくも此大悪を知バ何ぞ変るを引出さる泰時又父ふ等しは心あ
らバ暫時滅亡ふ及べを時政を祖とし義時を父とし無類の大逆なるま
子孫泰時より賢者有と九代の後栄をたぬ等しく是を天道の自然
ふ帰しと論と止む死の歎

皇朝御記 卷之五 出来

高井蘭山翁輯錄



有阪蹄齋老人圖



星月夜顯晦錄

全部二十八卷

出來

同 附錄

二卷

出來

平家物語圖會

全部十二冊

小說繪入讀本類數品出來

和漢西洋書籍賣捌處

大阪心齋橋博勞町角

群玉堂河内屋 岡田茂兵衛

